

## 29Q-am30

マウス急性および慢性搔痒モデルを用いた痒み反応の性差に関する検討

○伴野 綾奈<sup>1</sup>, 山浦 克典<sup>1</sup>, 上野 光一<sup>1</sup>(<sup>1</sup>千葉大院薬)

【背景】男女の生理機能的性差の疾病への影響は広く認知されている。近年ラットを用いた *in vivo* の検討において、痛みの感受性について性差があることが明らかとなった。一方、痒みは痛みの伝達経路の一部である C 繊維により伝達されるが、未だ搔痒反応についての性差は明らかとなっていない。今回我々は各種起痒物質を用いた急性搔痒における感受性の性差、ならびにアレルギー性接触皮膚炎マウスモデルにおける慢性搔痒、皮膚炎症状の性差について検討した。

【方法】①雌雄 ICR マウス(6 週齢)に各起痒物質(ヒスタミン、Substance P (SP)、Compound 48/80、セロトニン)を皮内投与することで急性搔痒を誘発し、搔破行動自動測定装置にて搔痒の性差を測定した。

②雌雄 BALB/c マウス(6 週齢)の耳介に 2,4,6-trinitrochlorobenzene (TNCB) 反復塗布によりアレルギー性接触皮膚炎モデルを作成し、その慢性搔痒ならびに耳介腫脹、血清 IgE について雌雄での薬理作用発現の比較を行った。

【結果】①セロトニン及び Compound 48/80 誘発搔痒に性差は確認されなかった。SP 誘発搔痒では高用量群において雄性群と比較して雌性群で搔破回数が亢進する傾向が認められた。

②TNCB により惹起した慢性搔痒および耳介腫脹に性差は確認されなかったが、血清 IgE は雄性群と比較し雌性群で亢進する傾向が認められた。

【考察】以上の結果から、統計学的に有意な差はないものの、搔痒の感受性に性差が存在する可能性が示唆された。